

ダンジョンに戦いを求
めるのは間違えている
だろうか？

蟹味噌汁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある戦場を一人血濡れた体で歩く一人の男が居た。身に纏う鎧はすでに原型を留
めておらず、壊れた鎧の隙間から見える体は傷つき、生きているのが不思議な程に数多
くの傷を負っている。しかし、その男は歩みを止める事はなかった。体の奥底から湧き
出る狂気が彼を突き動かし、終わりなき戦いの快楽を得るために、ただひらすら戦場を
歩き続けた。幼少の頃から殺し合いと隣り合わせで生きていた男は一つの話を聞く。
それは「ダンジョン」と呼ばれる終わりなき迷宮が存在するオラリオと呼ばれる都市の
話だつた。常に戦いを求める男は迷わずに足の向く先をオラリオへと向けた。これは
戦う事にしか生きる意味を見いだせない一人の男の物語である――

ふと書きたくなつて書き始めた小説になりますので続くかは分かりません。ヘイトのタグがありますが、そこまで過激な内容はありません。アンチ。

目

次

狂気孕んで

狂気の喜び

出会いから生まれるもの

クレインと言う男

ステータス

第6話

50 39 26 15 6 1

狂氣孕んで

一つの噂があつた。

それはどんな規模の戦場にも必ず現れると言われる狂氣を孕んだ狂戦士の噂。敵も味方もいない孤独な男は目につく全ての生物を切り裂き、引きちぎり、磨り潰し、殺してきたと言う。獣のような雄叫びを上げ、戦場を駆け回る姿は正しく魔獸そのものだと人々に言われる。

何時からか戦場の亡靈と呼ばれた男の存在は、勝つ筈の国が滅び、負ける筈だつたが國が繁栄を手にしたと言われる程に、その男は戦場に多大な影響を与えていたそうだ。

しかし、誰もその男の素顔を知らないと言う。それはその男と真正面から出会つた人間んが片つ端から殺されているからだ。老若男女関係なく戦場にいる人間は全てが敵。そんな狂氣を孕んだ男は戦場において最も恐れられ、畏怖される存在となつていた。

だが、何時からかその男は戦場に姿を現す事がなくなつた。一体いつからか、その正確な時期を判断する術を誰も持ち合わせていなかつたが、その男の行く先を予想付けるだけの噂が流行つていた。

—迷宮都市オラリオ

終わりのない「ダンジョン」と呼ばれる魑魅魍魎が蔓延る世界が存在する都市の話だ。その男がなぜ幾多もの戦場に現れては暴れていたのか、その理由を知る者はいないが、オラリオの話が流行りだした途端に男が戦場に現れなくなつた為、その男がオラリオへ消えたのだと、国々の兵士は安堵の息を零していた。

——知つてゐるか？ 亡靈がオラリオに行つたらしいぜ。

——迷宮都市だつたか？ 亡靈にも人並の欲つてもんがあるのかね。

——金……女……名声……なんかしつくりこねえな。

——狂人の考へてる事なんて分かるかよ。何はともあれ亡靈が消えてくれるなら何でも構わねえよ。

——ちげえねえ。

そして噂の張本人である戦場の亡靈と呼ばれた男は所々鏽付いた無骨な大剣を背中に背負い、迷宮都市オラリオの門を叩いていた。

酷く薄汚れたローブの隙間から見える口元は微かにつり上がりつており、その異様な風貌もあり隠しきれない狂気が滲み出していた。



薄暗く、じめじめとした空気が蔓延するオラリオ内のダンジョン五階層にて一人の男が身丈程の無骨な大剣を振り回していた。

二メートル近くはあるであろう鑄付いた大剣はダンジョンの壁を削りながら近くに居た数体のゴブリン、コボルトの体を力任せに引き千切る。鑄付いた刃はすでに刃としての機能を失つており、敵を切り裂くと言うよりは力任せに相手の体を引き裂く事しか出来なくなっていた。

欠けた刃に肉が突き刺さり、そのまま力任せに引きちぎられる。その痛みは一体どれ程のものなのか。知性、理性のないゴブリンやコボルト達は目の前の化け物に恐怖を抱き、そして恐怖した。冒険者を遅い、殺す事が最も強い本能と言われている魔物が怯えているのだ。目の前の理不尽な暴虐に。

しかし、その大剣を使う青年は関係ないと言わんばかりにダンジョンの壁含め全てを破壊していく。一体その細い体のどこにそれだけの力があるのか疑問に思うほどの速度で振り回される大剣は無情にモンスターの命を刈り取つて行く。

引き裂かれた臓物が周囲に散乱し、返り血が青年の体を赤く染める。ゴブリンの体内から零れ落ちた綺麗な石は大剣の嵐に見舞われ粉々に砕け散る。まさしく狂戦士のよ

うな戦いぶりを見せる青年に周囲を通りかかった冒険者は恐れを抱き、皆引き返していった。

そんな狂気染みた戦いを見せる青年はふと振るつていた大剣の動きを止めた。既に青年の瞳に動く生き物が見えなくなつたからだ。

——つまらない……。

青年の心中は決して穏やかなものではなかつた。より強い生き物と、自身に生きている実感と死と隣り合わせの興奮を味合わせてくれる強者を求め、遙か遠くの地にあつたオラリオに来たと言うのに、その内容は青年の心の渴きを満たしてくれるものではなかつたからだ。

ここオラリオにたどり着いたのはつい数時間程前。青年は迷う事なくダンジョンへと足を踏み入れ、長旅の疲れを癒すことなく、ダンジョンへと足を踏み入れた。そのまま歩みを止める事なく初めて見た異形の化け物に驚きながらも、その全てを殺しながらここまで降りてきていた。

その話を冒険者と呼ばれる人種が聞けばあり得ないと否定するだろう。それほどダンジョンと呼ばれる場所は危険な場所であり、一般人が入れる場所ではないのだ。だが、この青年は五階層まで無傷で進んでいる。どこか現れるモンスターの弱さに呆れ果てている程だ。

「所詮噂に尾ひれが付いただけだつたか」

無駄足を踏んだ。そう判断した青年は来た道を引き返そうと後ろを向いた。

その時だつた。青年の長年磨いた六感と呼べるもののが嫌な予感を告げる。その予感に従うように青年は後方へと大きく飛びのいた。その次の瞬間、青年が先ほどまで立つていた横の壁が破壊され、立ち上る煙の中から異形の巨体が姿を現した。

牛の頭に濃い毛の生えた人の体。その巨体は青年の三倍程があり、強者と呼べるだけの圧倒的オーラを纏つていた。

「こいつは…」

青年の顔には自然と笑みが浮かんでいた。自然と手は大剣の柄へと伸び、体は既に戦闘態勢へと入つてゐる。青年は恐れない。まるで恐怖と言う感情が抜け落ちてゐるかのように、歓喜と言う真逆の感情が青年の心を支配していた。

間違いなく青年の瞳に映る異形の怪物は強い。それこそ青年が今まで渡り歩いて来た戦場で出会つた誰よりも強いと本能が告げていた。だが、それこそが青年の心から求めていたもの。

まるで長年待つていた恋人に出会つたかのようすに青年は笑い、そして迷う事なく地面を踏み込み、異形の怪物——ミノタウロスの元へと駆け出していた。

狂気の喜び

青年は何も考えずに足を動かした。

瞳に映るは誰もが恐れを抱く風貌をした異形の怪物。身丈は三メートル近くに及ぶ巨体だ。そんな相手にするのも馬鹿らしくなるような化物に向かい、青年は恐れる事なく足を動かした。

青年の表情に浮かぶのは歓喜の笑み。久しく出会うことの出来なかつた強者との出会いに、心の底から湧き出る歓喜の感情を抑える事が出来なかつた。

相対する化物も鼻息を荒くし、ダンジョンを震わす程の雄叫びを上げる。それは己に向かつてくる青年を敵と認め、自身を奮い立たせる雄叫びだつた。同時、その雄叫びに呼応するかのように、青年も声を荒らげた。

「オオオオオオオオツ！」

そして一匹の化物と青年は交わつた。ミノタウロスは上から鉈を振り下ろし、青年は大剣を切り上げる。

交差するようにぶつかつた刃は鈍い金属音を響かせ、ぶつかる事によつて生まれた衝撃波は周囲の壁に亀裂を入れた。そのまま刃は離れる事なく鍔競り合いへと持ち込ま

れる。

大剣を持つ青年の身丈はミノタウロスよりも一回り以上小さい。だと言うのに二つの力は拮抗していた。小さく火花を散らしながらも重なる刃が片方に動く事はなかつた。だがこのまま睨み合つても仕方がない。そう瞬時に判断した青年は素早く次の行動に移る。

鍔競り合いしていた大剣の刃を少しずらす事によりミノタウロスの鉈を受け流した。突然拮抗していた力がなくなつた事によりミノタウロスはバランスを崩し、前のめりに体を傾ける。その大きな隙を逃さんと青年は大剣を横に構え体を深く沈める。その体勢のまま地面を強く蹴り、ミノタウロスの膝頭目掛け全力で大剣を振るつた。

「ツ!」

青年の予測では切断までいかなくとも大剣の重量ならば膝頭を破損させる事は出来るだろうと予測していた。それが初めて相手する巨体の怪物でもだ。それ程に青年は己の力を信じていた。その自信を裏付けるだけの実績もあつた。

だが手に響く感触は鋼の塊に打ち付けたかのような硬さであつた。全力で振り切つただけに切れなかつた反動は大きく、手に痺れが伝わる。

「ガアアアアアッ!!」

表面の皮に切れ目が入り、少しばかり血が滲む程度の損傷でも痛みは生じたのか、ミ

ノタウロスは咆哮を上げ、自身の懷に居る青年目掛け空いていた拳を薙いだ。

空気を震わせながら豪速で振るわれた拳を回避する余裕はなく、咄嗟に大剣の柄から右手を離し、防御に回す。そしてミノタウロスの放った横嵐の拳は青年に直撃する。

「ツ！」

攻城兵器にでも轢かれたのかと錯覚する程の衝撃が青年を這い、骨の折れる音が聞こえると同時に吹き飛んだ。勢いよく吹き飛んだ先で壁に打ち付けられ、肺に溜まっていた空気が吐き出される。

一化物が

たつたの一撃で青年の意識は朦朧とし、右腕は見るも無残な形になつていた。最早勝負の行方は見えていた。ミノタウロスは膝頭の薄い切り傷のみ。方や片腕が使用不可能になり、内蔵までに痛みが浸透する程の傷を負つていて。

ミノタウロスも自身の勝利を確信したのか、再び咆哮を上げる。

「五月蠅いだろうが……耳に響く」

だが青年は決して負けたとは思つていなかつた。その表情には未だに笑みが張り付いており、ゆつくりとした動作だが足を地面に付け、立ち上がる。

確かに青年の刃はミノタウロスの骨を粉碎する事は出来なかつた。だが、皮一枚は切り裂いているのだ。つまり、関節を破壊する事は出来ないが肉は切り裂く事が出来る。

その事実を認識した青年が諦める事は決してない。

「まだまだ…これからだろうが！」

そう声を荒らげると同時に青年は再び駆け出す。視界は少しばかりぼやけているが青年には関係なかつた。純粹に楽しんでいるのだ。この死と隣り合わせの状況を。そこから生まれるスリルを。それだけを求めここオラリオに来た青年が立ち止まる道理などなかつた。

相対するミノタウロスは自身に向かってくる青年を視界に捉えたまま、動く事が出来ず居た。理解出来なかつたのだ。青年が何故こうも動けるのか。

ミノタウロスからしたら青年は弱者の部類に入つていた。己を一撃で屠れるような存在ではないと本能で理解していた。だからこそ本気で放つた拳が直撃した瞬間に勝利を確信した。だと言うのに青年はその攻撃が効いていないかのようにこちらに掛けてきている。この生き物は普通の存在ではない。自身の理解の範疇を超えた存在を目にし、ミノタウロスはこの瞬間初めて恐怖と言う感情を感じる。

「シツ！」

動く事を忘れたミノタウロスの懷に容易に潜り込んだ青年は躊躇なく大剣を左腕一本で振るう。ミノタウロスも咄嗟に鉈を構えるが既に時遅し。袈裟斬りに振るわれた大剣はミノタウロスの肩から横腹まで真っ直ぐに切り裂いた。

「ガアアアアアッ!!」

生まれて初めて感じる激痛に叫び声を上げてしまう。既に次の攻撃に移ろうとしている青年目掛け鉈を振るうが乱雑に振るわれた鉈は虚しく空を斬り、お返しとばかりに続けて放たれた大剣の刃は両腿を切り裂いた。

このままでは殺されてしまう。この弱者に、傷を負った弱者に殺されてしまう。その事実を頭の片隅で認識したミノタウロスは自身の中に渦巻く恐怖の感情を無理矢理抑えつける。死にたくないと言う本来生物が持つ生存本能がミノタウロスに理性を取り戻させた。

「そうだ、それでいい。理性の失った獣では楽しめない！」

青年の使えなくなつた右腕を中心に右側に回り込もうと動くミノタウロスを見て青年は歓喜の声を上げる。互いに死と隣り合わせの状態。ここから死にたくないと自身の持つ全てを使いぶつかり合う。それこそが青年の望む殺し合いだ。

互いに流した血が多い。青年は言わずもがな、真正面から二度斬られたミノタウロスも大量の血を失っている。そこから導かれるのは短期決戦。それを互いに理解している二匹の雄は隙が生まれる瞬間を見つける為に立ち回り、時には刃を交える。

一体そのやり取りがどれだけ続いたのか、互いの息は上がり、動きも鈍り始めている。体に出来た傷もない所を探す方が難しい程になつていて。

そんな中、青年が唐突に動きを止めた。それと同時にミノタウロスも動きを止める。互いに血を流し過ぎた。このままではつまらない終わりになる事は見えていた。これ程の喜びを与えてくれた戦いの終わりがそれではつまらない。そう判断した青年は残りの体力を一振りに注ぐ。

ミノタウロスも青年の考えを理解し、青年の真正面へと立ちはだかる。最早ミノタウロスの中に恐怖はなかった。あるのは純粹な生への渴望と目の前の雄に勝ちたいと言う欲望だった。ならば、真正面から打ち勝つこそ、その欲は満たされる。

先程まで空間を満たしていた激しい音は鳴り止み、静寂が二人を包み込む。

乱れた呼吸を整え、互いの獲物だけを視界に捉える。先の事などどうでもいい。今この時の為だけに互いに全力をこの一撃に込める。

「おおおおおおおお!!」

「ガアアアアアアア!!」

同時に奮起の雄叫びを上げると同時に駆け出す。

青年は左手を持つ大剣を横から、ミノタウロスは最初と同様に上から鉈を振り下ろす。

互いの体が交差する一瞬、先に刃が届いたのは青年の大剣だった。残り全ての力が込められた刃がミノタウロスの横腹にくい込み、肉、内蔵を引きちぎりながら進む。

そしてミノタウロスの遅れた一撃が青年の左肩に食い込む。肉を絶ち骨を碎く一撃に青年は意識が遠のくが手に持つ大剣を離す事はない。

「勝つのは…俺だ!!」

ミノタウロスが鉈を振り切れればミノタウロスが勝つていたかも知れない。だが、ミノタウロスは鉈が青年に届いた瞬間に力を失っていた。それに対し青年は最後の力を振り絞り左腕に力を込める。鉈のくい込んだ傷口から夥しい量の血が吹き出るが青年は止まらなかつた。

「これで…終わりだあああああ!!」

「ブ…オオ…オ…」

青年が声を荒げると同時に大剣はミノタウロスの体を両断する。そのまま流れる大剣を止める力は既にないのか、そのまま地面へと倒れ込む。

最早首すら動かす事の出来ない青年はミノタウロスがどうなつたのかを見る事は出来ない。しかし、地面上に落ちる鉈の音と消えて行く気配から勝つたのだと理解出来た。
「感謝する…」

あれ程の喜びを与えてくれたミノタウロスと言う一匹の雄に敬意を払い感謝の念を口にする。それと同時に緊張の糸が切れたのか、急速に青年の意識は遠ざかる。
「悪くない、最後だったな…」

青年は長年求めた喜びを手に入れ、口元に笑みを浮かべながら瞼をゆっくりと閉じ、意識を手放した。

相対する者が消えた空間は再び静寂を取り戻す。

そんな中、遠くから何者かが掛けてくる音が聞こえる。音が聞こえた数刻後に姿を見せたのはまだ幼さの残る美貌を持つた金色の少女だつた。

「間に合わなかつた…」

少女は血溜まりの中に倒れる青年を見ると力なく地面に膝頭を付けた。その表情に浮かぶのは後悔の念。何故少女がそのような表情をするのか、それは本人にしか分からぬ。少女はもう一度血の海に倒れる青年に視線を向けると恐る恐る震える手を伸ばした。

これだけ血を流して生きている訳がない。そう思う反面生きていて欲しいと言う希望に縋り、血で濡れた背中にか細い指を添えた。

「…え？」

指先から伝わる微かな鼓動。最初は錯覚かとも思つた。だがその鼓動は今でも小さく動いている。

まだこの人は生きている。それが分かつた少女の行動は早かつた。

青年の血で青を基準とした美しい防具が汚れる事も厭わずに青年を細い体で背負つ

た。金色の髪が赤黒く染まり、未だに流れ出る血が少女の足を伝い地面を染める。
「死なせない…！」

そう小さく、力強く口にした少女は地面を蹴ると目にも止まらぬ速さで消えていった。二人が消えた場所に残るのは再び訪れた静寂と紫色に光る石。そして青年が持つていた大剣だけだつた。

出会いから生まれるもの

とある建物の室内に設けられた赤色の豪華なソファーの上で青年は静かな寝息を立てていた。

ミノタウロスとの死闘により出来た傷は綺麗に無くなつており、見るも無惨な形になつていて右腕も元の形に戻つていて、右肩の傷も同様だ。血で染まり防具としての機能を果たしていなかつた鉄くずは脱がされており、代わりに綺麗な衣類を着用していた。

「つかあ～！疲れたわ！」

そう口にしたのは青年が眠るソファーに寄り掛かるように体を預けている赤髪の女性。その額にはうつすらと汗が滲んでおり、彼女が青年に治療を施した事が伺える。

「万能薬がなけりや死んどつたでこの坊主。まつおかげで在庫は切らしてもうたけどな

豪快に口を開き笑う女性の周りには幾つかの中身のない空き瓶が転がつていた。

万能薬とは文字通り全てを治癒する事の出来る最上級ポーションだ。あの死にかけだつた青年を完全に治癒したのだからその効果は絶大だと分かる。しかし、その効果の

大きさから需要も高く、一つ五十万ヴァリスと非常に高価なポーションだ。

だがここオラリオに置いて最大級の規模を誇るロキ・ファミリアと言えど万能薬は決して安いものではない。何よりもロキ・ファミリアは現在進行形でダンジョン攻略へと遠征を行つてゐる。その為にここに置いてあつた万能薬は元々少なかつた。その少ない万能薬で青年は命を救われたのだから幸運と言えるだろう。

「ごめんなさい」

青年の様態が安定し、赤髪の女性一口キが喜びの感情を見せる一方で青年をここに連れてきた少女は悲痛な表情を浮かべる。既に血で濡れた防具は脱ぎ、髪に付いた血も綺麗に洗い流している。

手を前で組み、下を俯く少女に視線を向けるロキは大きく息を吐き出すと胡座を組んでいた膝を叩き立ち上がつた。そのまま未だに下を俯く少女の前に進み頭の上に手を置くと優しい手つきで頭を撫でた。

「なあアイズ。確かにこの坊主が死にかけたのはアイズらの油断が原因や。だけどな、冒險者つてのは常に危険が付き纏うもんや。自分より強い奴に出会う。そんなのはダンジョンに潜れば誰もが通る道やろ?」

「… うん」

「厳しいかもしいへんけど、この坊主がこうなつたのは坊主自身が弱かつたからや。だ

からあんまりアイズが気負う事はない』

ダンジョンで出会う敵は理性のないモンスターだ。ダンジョン内の敗北は死を意味する。だからこそダンジョンに潜る冒険者は敵を安全に屠るだけの力と覚悟を持つて挑まなければならない。そしてダンジョンは人工物ではない解明のされていない魔物の巣窟。何が起きても冷静に対処する事の出来る経験も必要になつてくる。それらを持ち合わせない冒険者を待つてるのは死だけだ。

過酷で残酷な世界だが、それでも人々は富、名声、栄誉、それらの夢をダンジョンに抱き、儘く散つてゆく。

「でも」

ロキはその事実を淡々と告げるが心優しき少女は納得出来なかつた。当然第一級冒険者である彼女も理解している。ダンジョンとはそう言う所だと。だが、頭でら理解しても心は納得出来なかつた。

「ならこの坊主が起きたら謝ればええ。アイズの事を許すか許さないかはこの坊主が決める事や」

「分かった」

－アイズを泣かしたらうちが止めをさしたるわ。

少女－アイズの前では優しい雰囲気を出しているが内心ではアイズを傷心させた青

年に小さな恨みを抱いている事はアイズには分からなかつた。

先程口キが口にした事は紛れもない本心だ。そこに偽りの言葉は一切混じつていな
い。

「ありがとう」

少女は俯いていた顔を上げ、小さく笑みを浮かべると口キにそう告げた。アイズに感謝された口キのテンションは瞬時に頂点へと至りアイズの頭を撫でていた手をどけるとわきわきと巧みに指を動かし始めた。

「ふへへ。なら万能薬のお代はアイズたんの体で払つて貰うでえ～!!」

先程までの雰囲気を見事粉碎し、イヤらしい笑と共に口端に涎を付けた口キはアイズに抱きつこうと両手を広げ目の前のアイズに近寄る。

だがアイズは慣れていると言わんばかりに口キの頭を抑えつけ、彼女の接近を拒む。見た目は華奢な麗しい少女でも中身はレベル5の第一級冒険者。一般人と何ら変わらない口キの力ではびくともしない。

「ひどいでアイズたん！ 少しぐらい触らしてくれてもええやんか！」

「いや」

その短くもアイズの心情全てが籠つた言葉に口キは力無くその場に崩れ落ちた。手に掛かる力がなくなつたアイズは口キを抑えていた腕を下ろすと視線をソファーの上

で眠る青年の方に向ける。

今でこそ万能薬の力により安定しているが、あと一步遅ければ間違いなく死んでいた程だつたと言う。青年を助けたダンジョン内ではあまり見えなかつたが、ここに連れてきて改めて青年の姿を見てアイズは息を飲んだ。

元の形が何なのか分からなくなる程に潰れた右腕。肺にまで達しているであろう肩の傷口。他にも大小問わない傷が大量に出来ていた。その傷を受けてしまつた大元の原因が彼女達にあるだけに今もアイズの心情は晴れやかなものではなかつた。

「う・」

そんな時だつた。ソファーの上で安静にしていた青年が小さく呻き声を上げる。続いて指先がぴくりと動くと閉じていた瞼がゆっくりと開いた。

「！」

青年が目覚めた事に気付いたアイズは青年の元まで近付くと腰を下ろした。それと同時に口キも青年が目覚めた事を理解し、未だにぶつぶつと文句を口にしながら青年の元へと歩いて行く。

「・・あ・・こ・こ・は・？」

視界に映る天井がダンジョンの岩肌ではない事に気付き思わずそう口にする。一瞬ここが地獄かとも考えたが、すぐ様その馬鹿馬鹿しい考えを否定する。

「… 大丈夫？」

隣で青年の事を眺めていたアイズに話しかけられ青年はそこでアイズとロキの存在を察した。傷の治つていてる体に見た事のない女性と少女が一人。

「助けられたのか。」

あの時助かり用のない傷を負つていた青年は死ぬものだと思っていた。だからこそ助けられたと言う事実は驚愕に値した。一方で命を繋いでくれた目の前の二人に感謝する。

「あんたらが俺を助けてくれたのか… ありがとう」

感謝の言葉を口にするが、寝たきりでは相手に失礼か。そう感じた青年は腕に力を込め、上半身を起こそうとするが上手く腕に力が入らずバランスを崩してしまう。咄嗟に横に居たアイズが青年を支えるがそれを見たロキが目を大きく見開いた。

「なにうちのアイズたんに触れるとんじやぼけえ！ はよ、手え離さんかい！」

触れたのはアイズの方からなのだが、そんな些細な事は関係ないとばかりにアイズの隣でそう喚く。が、アイズはロキの喚きを完全に無視し、口を開いた。

「万能薬は血まで補つてくれない。安静にしてないと駄目」

万能薬が一体何なのか分からぬ青年だが自身が極度の貧血状態だと言うのは今ので理解出来た。後ろで殺氣を放つていてるロキの事もあり、青年はアイズから離れ再びソ

ファーに体を預けた。

アイズから一先ず離れた青年を確認した口キは額に血管を浮かべながらも二人から離れ、反対側に設置されていたソファーに深く腰を下ろした。

未だに青年の方を睨んでいるが何も言う気配はない。所かチラチラとアイズにアイコンタクトを送っている。そんな口キの意図を察したアイズは青年の瞳を真っ直ぐに直視し、頭を下げた。

「ごめんなさい」

唐突に見知らぬ少女に頭を下げられ謝罪の言葉を口にされた青年は困惑する。それも当然の話だろう。

「何の話なのか分からない。俺は謝られる事をされたのか？」

「うん。あなたが戦ったミノタウロスは私達が逃がした」

酷く言葉足らずな物言いではあつたが、アイズの悲痛な表情を見て何となくは理解する事が出来た。

「あのミノタウロスはあんたらが逃がしたせいで俺の元に来た。つまりあんたらが逃がさなければ俺の元には来ることがなかつたつて事か？」

「そう…だから、ごめんなさい」

まだダンジョンの仕組みを何も知らない青年だったが、あのミノタウロスは本来あの

階層に現れない魔物だと理解した。同時にアイズに深い感謝の念を感じる。あの戦闘における幸福感こそ青年が長年求めていたもの。そんな相手を自分の元に届けてくれたのだから。更には死に体だった体を治療してくれたのもアイズ達だ。青年は頭が上がらないとはまさにこの事だと思つた。

「…なら謝罪はいらない。あの魔物と出会わせてくれた事に俺は感謝してる」

「え？」
「ほお」

青年の言葉に嘘はないと見抜く事の出来るロキは素直に驚きの声を上げた。あれだけの傷を負わせたミノタウロスと出会わせてくれて感謝する、などと言つてゐるのだ。驚かない訳がなかつた。それと同時に面白いとも思う。あのような経験をすれば心が折れても可笑しくはない。と言うのにこの青年にそんな様子は見受けられない。

「こいつ…なかなか面白い奴かもしけんな。

ロキは知つていた。青年の背中に刻まれてゐる筈の神の恩恵がない事に。それはつまり青年はレベルがない状態でミノタウロスを単独撃破したと言うことになる。レベルゼロでのミノタウロス撃破と言う偉業を達成する実力。そして心折れない胆力。青年は正しくダイヤモンドの原石と言える存在だろう。

「俺がここに来たのは強者を探すためだ。そんな相手に出会わせてくれた事を謝つて欲

「しくはない」

「え、うん。分かつた?」

「…本当に分かつているのか?まあいい。…取り敢えず笑え」

「え?」

突然青年にそう言われたアイズは意図を理解する事が出来ず小さく首を傾げる。

「目の前でそんな悲しげな顔をされたらこちらまで悲しくなる。だから笑え。それで今回の事は許す」

青年自身一体どの口がそんな事を言うのか理解に苦しむが、目の前のアイズが青年の言つた言葉の意味を理解していないのだから、そう言う他なかつた。

アイズも笑えと突然言われてどうすればいいか分からなくなるが、それで許してくれると言うのならと思い、ぎこちない笑みを浮かべた。

それは一目で作り笑いと分かる程度のものだつたが青年はそのぎこちない笑顔に一瞬だが見惚れてしまう。そう言つた経験がまつたくない青年だが、少なくともアイズの笑は鎧びつき、血でまみれた青年の心を溶かす程のものだつた。

「なあにが笑えだこの坊主!うちのアイズたんに色目使いおつて!やつぱりうちのファミリアに入れるべきやない!」

青年とアイズの間に出来た穏やかな空気をぶち壊すかのように血相を変えた口キが

青年に飛び掛かる。

「ツバが！」

青年が幾ら地力の強い男性と言つても腹に膝から乗られては痛みが生じる。それも青年は完全に油断しており、口キが放つた不意の一撃は文字通り青年の鳩尾に直撃した。

「この人もファミリアに入るの？」

青年の頬を抓り左右上下に引っ張りまわす口キに対しアイズは止める事なく疑問を投げ掛ける。

「その予定やけど……その前にうちのアイズたんに色目使ったことは許せへん！今後の上下関係言うやつを今の内に教えといたるわあ！」

「や、やへろ！こひふをほめへくれ！」

青年は頬を引っ張り回されながらアイズに助けを求めるがアイズは楽しげに心からの笑みを浮かべながら止める事はなかつた。

口キの中で青年がファミリアに入る事は決定事項となつていて。それは青年が英雄に足る器を持っているとそう判断したから。体に残る癒えない傷口の多さに心の闇を感じ取りはしたが、口キはそれを含め青年の成長と共に見守ることにした。その判断が口キ・ファミリアにどのような影響を与えるのかは誰にも分からぬ。

ただ、一つだけ言える事がある。ロキは青年の事を英雄足り得る器を持つ子供と捉えたが青年が持つ本質は真逆のものだ。英雄とは人々を救い、人々に愛される、そんな護る力を持つた人の事を言う。だが、この青年が持つものはそれらとはどうしよもなく真逆のもの。人々から恐怖され畏怖の感情を抱かれる破壊の狂気。彼の本質を知つたファミリアの人間はどう動くのか。この出会いは何をもたらすのか。既に運命の歯車は回り始めてしまつた。その歯車は神々にも、もう止める事は出来ない。

クレインと言う男

「クレイン。クレイン・フォン・グラヴィス。それが俺の名前だ」

落ち着きを取り戻した口キはクレインと名乗った青年の反対側のソファーに胡座を組み座っている。先程まではこの場にアイズも居たが、神の恩恵を与える為に一度部屋を出てもらつていて。最もそれは建前の理由であり、本音はクレインと言う男の出生を知る為だ。彼の体に残る傷跡は普通の生活を送つて出来るものではなかつた。その理由を知る必要が口キにはあつた。

「クレインな。これからうちのファミリアに入るに当たつて聞いておきたい事があるんだがええな?」

口では了承を得ようと確認して来てはいるが、目は有無を言わざない眼光を放つている。先程の情けない雰囲気とは真逆の鋭く尖つた刃を喉元に突きつけられているかのようないふり氣。これが本来の口キが持つものなのだろうとクレインは納得する

ちなみにクレインはファミリアと言うものがなんだか分かつていない。が、それを言える空氣ではなかつた為、組織的なものだろうと自己完結した。

「ああ、構わない。何が聞きたいんだ?」

と、クレイン自身口にはするものの、ロキが聞きたい事の内容は大方日星が付いていた。十中八九、オラリオに来る前の自分の事だろうと。そしてその内容を聞いた上でファミリアとやらに入つてくれと言うのなら、その時は入ろうと考えていた。

「簡単な事や。クレインが生まれてから的人生。長くなつても構わんから話してみ
〔：〕人に人生を語つた経験がない。上手く話す事は出来ないがいいな？」

「何でもええからはよ話さんかい」

先を急かすロキのマイペースな態度にクレインは思わず苦笑いしてしまう。それも一瞬の内で、続けて小さく息を吐き出すとゆつくり口を開いた。過去の忘れていた記憶を掘り返しづらやけている記憶を鮮明なものへと変えて行く。それは酷く残酷な地獄のような光景。二度と思い出す事はないだろうと思つていた過去の地獄を遡つて行く。

「俺は小さな国の上級貴族の長男として生まれた。妹と弟が一人ずつ居た。裕福な何不自由ない暮らしだったよ。小さい国とは言え上級貴族だつたからな。戦争もない。紛争もない平和な国だった。だからだろうな、平和ボケしてた俺達は、屋敷の兵は盜賊団

の襲撃に対応出来なかつた」

クレインの脳内に再生されるのは忌まわしき始まりの記憶。あの盗賊の襲撃が全てを壊し、今のクレインを作り上げる切っ掛けだつた。

「確か六歳の俺の誕生パーティーだつた気がする。交流のある貴族達を招いて屋敷の庭園で盛大に祝つてくれた記憶がある。そのパーティーの終わり際だつたか、大人達に酒が回つたタイミングを見計らつて奴らは襲撃を仕掛けってきた。

屋敷に配備されていた兵が纏まりのないまま盗賊団に突つ込んで行つてたな。そして呆気なく全員死んだ。その時に初めて人の死と言うものを見た」

つい先程までパーティー会場で生きていた兵が血を吹き上げ、臓物をぶちまけるその光景は当日六歳と言う幼さだつたクレインには残酷すぎるものだつた。

「怖くなつた俺は一人で逃げ出したよ。弟と妹を置いて、一人で逃げ出した。死ぬのが怖くて逃げたんだ俺は…守らないといけなかつたのに」

先程まで淡々と語つていたクレインだつたが次第に熱が入り語尾が強まる。握られている拳は小さく震えており、それは怒りか憎しみか、はたまたその両方か、彼の心境を表していた。

「…妹と弟はどうなつたんや？」

「分からない。父や母もどうなつたか分からない。一人で逃げた俺は盗賊の一人に捕

まつたからな。逃げれる訳もないのにな。

そこからの記憶はあまり覚えていない。

奴隸商人に流され誰に買われたのか、ただ毎日が地獄の日々だつた。俺を買ったヤツが特殊な性癖を持つていてな。言う必要があるか？」

「…いや、ええわ」

口キはクレインの口から語られた内容に驚くと同時に酷く後悔していた。クレインの体にあつた無数の傷。それを見ればある程度の内容は察する事が出来ただろうに。自分がしている事はただクレインのトラウマをほじ繰り返しているだけではないのか？と。

だが、自分のファミリアに入るのならば素性を知る事は必須だ。それがクレインの為にもなり、他のメンバーの為にもなる。そう考えている口キは軽い自己嫌悪になりながらも聞き手に徹した。

「だけどな、そんな地獄も一年で終を告げた。運がよかつたのか俺を買った奴が住んでいた国は戦争をしていたらしくてな。地方の領主だつたそいつは敵国に責められ俺の目の前で死んだよ。無様な姿を晒しながら、俺に助けを求めながらな。

終わつた。助かった。その時はそう思つていた。だがどこまでも俺は運が悪かつたらしい。七歳の俺は敵国の捕虜にされたよ。その国の人間じやないつてのにな」

「…」

「ただな、捕虜なんてその国には必要なかつた。圧倒な武力を持つていたその国に捕虜なんて存在は資材を食い荒らす家畜でしかなかつたらしい。そこで國の人間が思いついたのは捕虜の女子供を使つた囮作戦だつた。俺達捕虜の前で同じ捕虜を拷問し殺す。徹底的に俺達に恐怖を植え付けてからあいつらはこう言つた。

死にたくなければ農民を装い敵兵を殺せとな。

作戦内容は簡単だ。國の兵士が相手の領土内の村を滅ぼし、その村人に成り代わつた俺達が救援に来た兵士を殺す。そんな内容だ。

穴だらけの作戦だと思うだろ？別にそれでよかつたんだよ。俺達は変えの効く駒だ。成功すればラッキー程度の考え方だ。」

「… ふざけとるな」

確かにクレインが口にした内容は道徳に反する残酷な行為に他ならない。だが、それが戦争だつた。勝てば天国、負ければ地獄。その簡単なルールに乗つかり、人々は地獄に墮ちないようどんな手でも使う。

「確かにふざけた内容だつた。それでも死の恐怖を植え付けられた俺達は藁にすがる思いでその作戦に乗つかつた。

その結果、俺は二度に渡りその作戦を生き残つた。周りの捕虜だつた人が減つていく

一方で俺は生き残った。

だが相手兵士も馬鹿じやない。三度目の作戦は当然失敗し、俺も敵兵に斬られた。自分の体から溢れ出る血と激痛を感じて死んだと思つた。それと同時に酷く安心したのを覚えてるよ。これで終わるんだと』

思い出すのは地獄の光景。視界には人の死体と炎、空を覆い尽くさんばかりの黒煙。鼻につく臭いは吐き気を催す悪臭だつたとクレインは鮮明に思い出す。

クレインの瞳には何も映つておらずまるで死人のように淡々と口を動かしている。その姿に薄ら寒いものを感じた口キは一度休もうとクレインに声を掛けようとするが、彼は再び口を開いた。

「だが俺は死ななかつた。黒いローブを纏つた女が俺を助けてくれた。その顔までは視界がぼやけて見る事は出来なかつたが俺の隣に座り込んだ女はこう呟いていた」
一生きたいなら殺しなさい。

「つてな。その意味は理解出来なかつたが俺は何故かその女に手を伸ばしていた。この人は命を救つてくれるつて頭のどこかで感じていたんだろう。女は懐から何かを取り出すと俺の口に何かを入れた。そこからの記憶は完全に思い出せない。ただ、目を覚ました俺の隣にはその女がいない代わりに一本の剣が置かれていた。そして俺は命を繋ぎ止めた」

「… その剣はどこにあるんや？」

「聞きたい事は幾つかあつたが、一度話を本筋から逸らす為にどうでもよさそうな事を問い合わせる。

「… そう言えば俺の剣は何処だ？あれをなくす訳にはいかない」

そう首を左右に動かし辺りを見渡すクレイン。その瞳には光が戻つており、あの異様な雰囲気が無くなつた事に口キは小さく安堵の息を零した。

しかし、自分から話を振つたはいいが、口キ本人もクレインが持つていた武器は見ていない。アイズが彼を連れてきた時には既に武器は持つていなかつた。

「多分やけどクレインが倒れとつた場所にあるんやないか？アイズは何も持つとらんかつたで」

「… そうか。なら今直ぐ取りに行つていいか？あれを無くす訳にはいかない」

クレインの言い草からしてその女の代わりに置いてあつた剣は今でも使つてているのだろう。それはつまり十年以上もの間クレインは同じ剣を使い続けている事になる。

その事実に口キは怪訝に思うもクレインが嘘を付いていない事は分かる。気を逸らす為に剣の話に切り替えたが、その女の事も含めその剣の事が気になり始める。

「一休憩挟む意味でもええタイミングか。

「まち。あんたはまだ体調が完全やないやろ？それに剣が落ちてる場所も分からん筈

や。アイズに行かせるからちよいいまち」

先程の落ち着いた雰囲気とは打って変わりそわそわし始めたクレインを傍目で見ながらドアの前で待機してゐるであろうアイズに声を掛ける。

「アイズ！ ちょっと来てくれへんか！」

口キの言葉に間を挟むことなく扉は開き、隙間からアイズがひょこりと顔を覗かせた。

「なに？」

「クレインが倒れどつた所にこいつの剣が落ち取らんかったか？ それ大切なもんらしくてな、すまんが取つてきてくれへんか」

「分かった」

間髪入れずに返事を返したアイズは素早くドアを締め、目にも止まぬ速さで廊下を掛けていった。レベル5の速度は凄まじい。直ぐに取つてくれるだろう。そう分かっている口キは改めてクレインへと視線を向ける。

「アイズに任せたから安心し。直ぐに取つてくれるわ」

「… すまない。感謝する」

その言葉を最後に部屋は静寂に包まる。

なんか気まずいな、と感じる口キは部屋の空気を変えようと話題を考えるが、目の前

にいるクレインは先程出会つた初対面のようなもの。先程の重すぎる話もあり、口キは何をどう切り出せばいいか迷つていた。

「もうこうなつたら最後まで聞かなあかんか。」

それは今後クレインの主神になる者としてか、口キ個人の考えなのか、彼女本人にも分からぬが、話の続きを聞くために再び口を開いた。

「アイズが戻つてくるまでに聞かせてくれるか？まだあるんやろ？」

「ん？ああ、一応はあるが…そこからは大した話はない。ここオラリオに来るまではひたすら戦場を駆け回つていた」

大した話はないと言う言葉に口キは少しばかり安心したが、それに続いて発せられたものは捨て置けないものだつた。オラリオに来るまで戦場を駆け回つていた。それはつまり十年以上の間戦場に出向いていたと言う事になる。繰り返すが神である口キに嘘をつく事はできない。つまりクレインの言つた事は事実に他ならない。

「ちよちよちよーまちいやー！クレインは死にたくなかつたんやろ！なのに何でまた死に行くような事をしとんねん！」

口キの問いかけにクレインは眉を寄せ返答に詰まる様子を見せる。

「…最初の頃は俺にも分からなかつた。ただ何かに突き動かされるように戦場を求めた。当然何度も死にかけた。だが何度も死にかけ、それでも戦場を駆けていると一つの

事に気付いたんだ。

：笑つてたんだよ俺は。あれ程の恐怖と憎しみを生んだ戦場で笑つてた。その事に気付いてからだつたか、戦うことが楽しくて楽しくて仕方がなくなつていた。どうしてそんな事になつたのか分からないが、それが今俺だ

「なんや…それ」

口キの視界に映る青年は何ら変哲のない人間だ。だと言うのに、クレインの話を聞いてから口キの瞳にはクレインが得体の知れない何かに見え始めていた。

英雄？そんな存在では決してない。確かに英雄足り得る実力と折れない胆力は持つているだろう。しかし、彼はどうしよもない程に壊れていた

「なら神の恩恵も貰わんとダンジョンにもぐつとつたのは…」

「命を賭してでも楽しめる殺し合いだ。その為の強者を求めて俺はここに来た」

クレインの言葉を聞き、口キは体全体に張つていた力が抜けていく感覚が分かつた。

彼は決して口キの求めた原石などではない事が分かつたからだ。磨けば磨くほど光を放つ石ではない。磨けば磨くほど死をもたらす破滅の原石だと理解出来たからだ。

その異常性を理解してしまつた口キは天井を見上げ大きく息を吐き出した。

一つたく、とんでもない奴が転がりこんできたもんや。

口キは考える。クレインをファミリアに入れるべきなのかを。この壊れている青年

を入れる事によつて大切なものが壊れてしまわないかと考える。

クレインはそちらの弱小ファミリアでは間違ひなく持て余す人材だと分かる。間違ひなくクレインと言う存在は善からぬものを招くと断言出来る。だからこそ、彼を救えるのはロキ・ファミリアと言つたオラリオでも頂点を争う巨大なファミリアだけだろう。

とは言えロキとて聖人ではない。神界に居た時こそ酷く荒れていた彼女だが、この下界に降り立ち大切なものを見つけた彼女は変わつたのだ。それと同時に表立つて見せる事はないが、その大切なものが壊れる事を恐れている。だからこそ安易にクレインのような存在を入れる訳には行かないのだがー。

—うちがそんなんで…誰がこいつを救つてやんねん。

ロキは覺悟を決める。例えクレインが壊れていると知つていても、家族と言う存在を知つた自分が家族を失つたクレインにそれを与えると決めた。

「なるほどな…クレインの事はよお分かつたわ」

その言葉にクレインは察する。恐らく自分はここから追い出されるだろうと。自分のような存在は拒絶されるだろうと、頭の片隅で理解した。しかし、決して悲しくはなかつた。オラリオの外でも似たような経験があるからだ。所詮ここも同じだと言う事。そう思いながらもクレインは静かにロキの言葉の続きを待つた。

「その上で言わせて貰うわ。うちのファミリアに入り」

「…何？」

思つていたのとは違う言葉に素つ頓狂な声を思わず出してしまったクレイン。そのまま見て口端を歪めたロキは口を開いた。

「出ていけ言われると思つたんかあ!?んな訳ないやろ！これからクレインはうちの下でヒヒヒイ言いながら働かなあかんで！ちなみにクレインの意思是関係ない！これは強制やで！」

そう癪に触る様子で大口を開けて笑うロキを尻目にクレインは未だに驚きの表情のまま固まっていた。理解出来ないのだ。自分のような存在を受け入れると言つた目の前の彼女が。今までクレインに向けられた目は恐怖の感情だけだった。幾つかの例外はあるが、ロキのような優しさに触れたのは初めての経験だった。

「俺が言うのもなんだがな…：あんた変わってるよ」

「その変わつとるうちの下で働くのはクレインやねんで？」

ロキの態度にクレインは自然と笑みを浮かべていた。恐らく、いや、間違いなくロキのファミリアに入つてもクレインは変わらない。相も変わらずに戦いを求めて血で染まる戦いをする。

クレインは思う。そんな自分を受け入れてくれると言うなら、また家族と言うものを

求めていいかもしないと。時には羽を休める事も大切だと、そう自分に言い聞かせる。

「… そうだな。… これから宜しく頼む」

「逃げようとしても逃がさへんからな？ 覚悟しいや！」

こうしてクレインは新たな居場所を得た。一度は失い、再び手に入れた家族と言うものを無くさないようにと、壊さないようにと、クレインは自身の内に確かな覚悟を決めた。

ステータス

クレインの過去の話を聞いた上で、クレインを受け入れると決めたロキは改めて神の恩恵を授けようと話を進めていたのだがその途中で問題が生じた。ロキとしては当然ながら神の恩恵やファミリアの存在を知っている前提で話していたのだが、クレインはそれらの存在を欠片も知らない事に気付いたのだ

——こんな状態でおダンジョンに潜ろう思えたな…

それこそクレインの性格によるものだと分かつてはいるが、その無知故の無謀さには呆れるしかなかつた。

とは言え、オラリオに置いて常識と言われるそれらの話は覚えて貰わなければ話にならない。面倒だと感じながらも面に出すことなくロキは一つ一つ丁寧にクレインに説明した。

「つちゅうのが神の恩恵や。分かつたか？」

オラリオがなぜ出来たか。ロキを含めた神の存在。神が与える神の恩恵や眷属、ファミリアの事全てを早口に、かつ丁寧に説明したロキは若干の息切れを起こしていた。

しかし悲しき事に相手が悪かつた。過酷な人生を歩んできたクレインがまともな教

育を受けていたのは六歳まで。その後の人生に置いて戦闘以外の知識を学ばなかつた彼の脳は何処までも覚えが悪くなつてゐた。興味がない事には集中力が働かない人間がいるが、まさにクレインはその典型だと言えるだろう。

「…」

口キの説明に眉を潜め怪訝な表情を示すクレインを見て彼女は嫌な予感を覚えた。自身の苦労が無駄になつてゐるかも知れない。そんな一抹の不安を打ち消したいが為に彼女はクレインに問い合わせた。

「なあクレイン。うちが言つた事を簡潔に纏めて言つてみ」

そう命令口調で告げ、クレインの返答を待つ口キだが、クレインは小難しい表情をしたまま中々口を開こうとはしなかつた。部屋に置かれた時計の針を示す音だけが虚しく響く。

そのまま五分程の時間が経過しただろうか。クレインは意を決したように目を見開くと口キの方を真つ直ぐ見据え口を開いた。

「つまり俺は戦えばいいんだな？」

間違えてはいない。間違えてはいないが、クレインが理解出来た事は神の恩恵を受ける事により常人には発揮出来ない力が手に入ると言う戦闘面に関する事だけだつた。オラリオの始まりに関しては何も覚えておらず、口キなどと言つた神に関しては凄い存

在程度にしか覚えていない。よつてクレインが下した結論は一つだつた。迷宮に潜り戦う。それがこのファミリアに利益をもたらすと言う事だ。

「つかあゝ……あかんわこいつ」

クレインの頭の悪さに口キは早々に諦めを付ける。とは言え戦えばいいと言うのも一種の正論。クレインはどう考へても戦闘員としてしか運用出来ない。その為口キはやるせない気持ちになりつつも納得する事にした。

口キがクレインの特殊っぷりに翻弄される一方でクレインはふと過去の事を思い出していた。

「… そう言えばオラリオの外にも口キと似た雰囲気を出すやつがいるな。今思えば彼女も神だつたのか」

「ほお」

本来オラリオ以外に神がいると言う事は珍しい。決していらないと言う訳ではないが、オラリオの外で神に出会うのは運が良いと言えるだろう。大多数の神はオラリオの中で生活しているだけに余計だ。

そう言つた経緯もあり、素直に口キは驚く。それと同時にどの神かも気になり尋ねる事にした。

「名前はなんて言うんや？」

「アレアと名乗っていたな。…… 正義感の強い美しい女性だつた」

クレインが口にした名前の神はいない。が、正義感の強い女性と言う単語でおおよその検討は付ける事が出来た。

——女神アストレアか。…… 確か敵対してたファミリアの怪物進呈を受けてファミリアは壊滅した筈や。…… 名前を変えて都市外に逃げてたんか。まあ最低限の処置つて感じやな。

神が人々の住む下界に降りてくるに辺り、その力の使用は禁じられているものの、その体からは意図せず神威と言う雰囲気、オーラのようなものが出てしまう。その為下界に住む人々は神を見れば一目でその存在が神だと認識出来る。だからこそ名前を変えると言う行動はやらないよりまし程度の最低限の処置に過ぎない。

「そのアレア言うんは何しとつたんや？」

「戦争孤児を養っていた。戦争によつて親を無くした子供なんて腐る程いる。かく言う俺も一時は彼女の元で世話をになつていた」

そう語るクレインは戦場で死にかけた所を救つてくれたアレアーーアストレアの事を思い出していた。正義感が強く、自分の信念を決して曲げない強い女性だつたと彼は記憶している。その為クレインの自殺紛いで正義とは真逆の行いに何度も意見のぶつかりあいになつていた。最終的には彼が逃げ出す形で彼女とは別れたが。

「……また何時か彼女の元を訪れたいものだ。結局最後まで礼を言うことができなかつた。

親身になつてクレインの行いを止めようと声を荒らげるアレアの存在を当時は疎ましく思つていたが、口キと出会つた今、思えばそれも自分の為を思い言ってくれたものだと理解出来た。

「なるほどな……優しいやつちやな」

「ああ、厳しいが優しい人だ。口キは彼女の事を知らないのか？」

そう問われた口キはどう返答するものかと頭を悩ませる。当然オラリオの中で活動していたアストレアの事は知つてゐる。活動内容からその末路まで。しかし素直にそれをクレインに告げていいものかと口キは悩む。

——うちが勝手に話していい事ちやうか。

そう考えた口キはクレインの間に首を横に振るつた。

「……どうか。まあ知つていたからと何かが変わる訳ではないか」

その言葉を最後に二人の会話は途切れる。それぞれアストレアと言う女神に対して異なる思いがあるが、これ以上彼女について話しても意味はない。逸れてしまつた話を戻す為に口キは口を開いた。

「そろそろクレインに神の恩恵を授けよお思うんやが……構わんな？」

「…ああ。頼む」

神の恩恵を授かつた者はその神の眷族になる。つまりはファミリアと言う組織の一員になる。互いに思う所があるだけに室内の雰囲気が重くなる。

「上脱いで楽に背向けてみ」

ロキの言われた通りに上を脱ぎロキの方へと背中を向ける。ロキもソファーから立ち上がり、クレインのいる方へと歩みを進める。

その表情は少しばかり強張つており、彼女の心境がよく表れている。しかし、それはクレインも同じことであり、二人が心の中で思う事は違うものの、この契約は両方にとつて特別なものになるのは違いない。その心境が二人の表情を強張らせていた。

「少し邪魔するで」

そう言いながらクレインの隣に腰を下ろし、彼の背中に視線を向ける。そしてロキの視界に入る数えるのが嫌になる程に出来上がった傷。大小はあれど、その傷の多さがいかにクレインが戦場に長い時間立っていたかを物語つていた。

——よくもまあ死ななかつたもんやな。

数多もの傷の中には右肩から背中に掛けて一直線に伸びている大きな傷もある。その傷は既に癒えてこそいるものの、死んでいたつて可笑しくない程の傷だ。だと言うのにクレインはいまだに生きている。今回のミノタウロスに負わされた傷も本来なら死

んでいても可笑しくはない傷だつた。

——運が良いだけで済ませられるレベルかいな……まあ今考えても仕方があらへんか。

その事に何か引っかかりを感じながらも、その考えを打ち消す。今はクレインに恩恵を授ける事が優先だ。

「少し痛みが走るかもしれんけど我慢せえ」

「分かった」

クレインの短い返事を聞いてから、ロキは彼の背中に手を伸ばす。そして伸ばされた指先がクレインの背中に触れた途端に眩い光が部屋の中を満たした。

「ツ?!」

それと同時にクレインとロキに鋭い痛みが走る。

——なんや!?

本来神の恩恵を授ける時にロキにに関してはそのような痛みは生じない。だと言うのに、クレインに神の恩恵を受けようと神の力をクレインに流し込んだ瞬間、まるで何かに反発するかのようにロキに痛みが走る。その事に困惑を隠せないでいるも、クレインの背中には文字のようなものが浮かび上がりは消えを繰り返している。

——何が起こってるんや!?

「がっ、あああああああああああっ!!」

ロキが目の前の初めて見る現象に困惑している最中、クレインが悲鳴を上げる。未だにクレインの背中に浮かび上がる文字は浮かび上がっては消えを繰り返しているが、それと同時にクレインの体に小さな亀裂が入り始めていた。そのどれもが小さな傷だが、その傷からは少なくない血が流れ始めている。

「クレイン!? しつかりせえ!!」

そして畳みかけるように不可解な事象が起ころる。クレインの裂けた傷口から流れ出た血が流れに逆らい、彼の背中に集まり始めたのだ。一か所に集まつた血はやがて文字の形をつくり、クレインの体に染み込むかのように消えていった。それと同時に浮かび上がっていた文字も消え、クレインを襲つていた激痛も消え去つた。

「つく…」

体を襲う痛みがなくなつた事により、クレインは前にのめり込む様に倒れる。

「クレイン!?

突然倒れたクレインに驚きながらも支えようと手を伸ばそうとしたロキだが、その最中に彼の背中に刻まれたステータスが目に付いてしまつた。

「なんや、これ…」

そこでロキの目に入つたステータスは異常と呼ぶに相応しいものだつた。

クリエン・フォン・グラヴィス L V.	種族	-
力 0	力	-
耐久 0	耐久	-
器用 0	器用	-
俊敏 0	俊敏	-
魔力 0	魔力	-
魔法 0	魔法	-
スキル 0	スキル	-
狂戦士化		
・スキル狂戦士化の侵食具合により効果が変動。		
浅 少量なステータスの向上。		
中 レベルが1上昇。		
深 レベルが2上昇。		
狂喜乱舞		
・スキル狂戦化の発動内容により効果が変動。		

・効果上限に近づく程に全ステータスに大幅な加算が加えられる。

戦闘継続

- ・魔力を用いて動けなくなつた体を強制的に動かす事が可能。
- ・痛覚等、戦闘継続の妨げとなる感覚、感情を阻害。

生命渴望

・死に瀕する程ステータスの伸びが早くなる。

—————

レベル1にも関わらずレアスキルが四つある事も異常だが、ロキが驚いたのはそこではなかつた。本来ステータスの欄に種族と言う項目は存在しない。だと言うのにクレインのステータスには種族と言う項目が存在し、更には文字化けを起こしておりロキにもその内容を読み取る事は出来なかつた。

ステータスとはその者の魂の器を数字化したもの。つまりロキの視界に映る文字の羅列は嘘偽りのない正しい表記であり、ロキ自身もステータスを偽装する事は出来ないと分かつてゐる。それだけにクレインのステータスは衝撃が大きかつた。

「クレイン……あんたほんまに何者なんや」

クレインは既に気を失つており、ロキの呟きに気付く事は無かつた。

先程痛みが生じた指先に目を向けて見ればクレイン同様指先に亀裂が入つており、少

なくない血が流れていることに気付く。しかし、その血を拭おうとはせず、ロキはクレインを助けたと言う黒ローブの女について考えていた。

だからこそロキは気付くことが出来なかつた。ロキの指先から垂れた血がクレインの背中に付着し、肌に染み込むように消えていった事を。

第6話

「黒ローブの女…なあ」

クレインの話の中から出てきた、命を救つたと言う黒ローブの女。先の神の恩恵を授ける際に生じた異常は全てこの女が原因ではないかとロキは睨んでいた。

あの指先に感じた鋭い痛み。あれはまるでロキの力を拒むかのように、ロキの力に反発するかのような衝撃だった。神であるロキの力に抵抗出来るもの。それは同じ神の力を持つてしなければ不可能だとロキは考える。

つまり、クレインの体内には既に神の力が混入している事になる。他の可能性を考えるのならば、神と人間の間に出来た子供と言う線もあるが、そんな存在は聞いた事がない。普通に考えるならば話の中から出てきた黒ローブの女を疑うのが筋と言うものだろう。

「何かを飲まされた… 神の血、つて所やろな」

そう考えれば先程生じた異常の原因にも理由が付く。が、通常の人間が神の血を飲み生きれる筈もない。それこそ神の恩恵を受け、レベルを極限まで昇華させ、限りなく魂の器を神に近づければ可能だろう。だが当時のクレインはレベル云々の話以前に体す

ら出来上がつてない少年だつた。そのような体で到底神の血を受け入れる事が出来る訳がないのだが……。

「実際にクレインは生きとるしなあ……。」

まさかこのような異常事態にまで発展すると思つていなかつただけにショックが大きい。クレインに発現したレアスキルの効果も含め、これから先どう扱えばいいのか分からなくなつてしまう。

しかし、異常事態が発生したとは言え神の恩恵は授けてしまつた。つまり、クレインは立派なロキ・ファミリアの一員なのだ。放つて置く事は出来ないし、当然そのような処置をするつもりはないとロキは考えていた。

「ほんまにとんでもない問題児が入つてきたもんやな」

そう苦笑しながら気を失い倒れているクレインの頭を優しく撫でる。何故か先程の傷は全て塞がつており、今では静かな寝息を立てている。その事もあり慌てる必要はないと判断したロキだが、傷が塞がつてゐる事に再び疑問を覚える。

「種族欄の文字化け……クレインの魂が変化を起こしとるなんか？」

神の血を魂に取り込む事により根本的に人と言う種族から外れてしまつてゐる。そう考えればこの治癒力にも説明が付く。他にもレベルを持たない者がミノタウロスの攻撃を受け、生きている事を考えれば肉体も頑丈になつてゐる可能性が高い。

「まあ今すぐどうこうなる問題やないやろ。そろそろ帰つてくるやろうしな」

「うち一人で判断できへんしな。

そう口にしながらソファーカラ立ち上がり、窓の方へ近寄る。そこから見える景色には、大通りの一部に遠くからでも分かる程の人混みが出来ていた。

「ええタイミングや」

あの人混みは遠征から帰つてきたファミリアの者達を囲む人混みで間違いないだろうと口キは窓を開き、身を乗り出す。ホームに帰つてくる子供たちを迎える為に。

「彼が噂の新人君かい？」

遠征から帰つてきたファミリアの子供達を迎へ、労いを終えた口キは団長のフイン、副団長のリヴエリア、そして無骨の大剣を重そうに抱えるアイズを連れクレインが居る部屋に集まつていた。

「： ああ、アイズから聞いとるんか」

「一応ね。僕達が逃がしたミノタウロスに殺されかけた人がファミリアに入る事になつた、とは聞いていたよ」

「なるほどな」

フインの言葉にそう相槌を返しながらソファーに腰を下ろす。フインとリヴエリアも同様に空いている席に腰を下ろした。アイズはクレインがうつ伏せで眠るソファーに大剣を立て掛けそのまま寝ているクレインの隣に静かに腰を下ろす。ただ、アイズの視線はクレインの背中に向けられており、傷跡の多い背中を凝視していた。

フインとリヴエリアもその傷痕の事が気になるが、本題はその事ではないと口キの雰囲気から薄々察しており、本人の口から説明があるまで口を開かない事にした。

「で、そのクレイン言う新人の事なんやが……これまたえらい問題抱えたやつでな」

そう口にしながら一瞬だけ視線をアイズが持つてきた大剣に向ける。

「これが黒ローブの置いていった剣やろうな……これでほぼ確定や。

口キはその大剣が普通の大剣で無いことを一目で見破っていた。決して通常の人間では分からぬ。神である口キだからこそ分かる程度の異常性を。

そもそもレベル5であるアイズが重そうに抱えている時点で異常なのだ。一級冒険者が持つ力は常識では考えられないもの。少なくともその力は身丈よりも大きい大剣を抱えた所で重さを感じる程度のものではない。

「まあ面倒な説明は省くさかい、率直に言わせてもらうとやな……こいつにはどつかの神の血が混ざつとるねん」

「……これまたいきなりだね」

「……精霊ではなく神と来たか」

「……」

「第三者三様の反応を見せる。皆外見はあまり驚いていないように見えるが、内心では初めて聞く存在に大きく動搖している。精霊に関してはアイズなどの存在もおり、アイズの他にも精霊の血が流れている者はいる。しかし、神そのものの血が混ざつてているなどと言う話は聞いた事がなかつた。」

「彼に神の血が混ざつていると言うのは事実なんだね？」

そう確認された口キは先程の恩恵を授ける際に負つた指先の傷を見せる。

「さつきこいつに恩恵を授けとつたんやけどな、そん時にうちの力が弾かれたんや。他にもこいつの過去に色々あつてな。ほぼ確定思つてええで」

「分かつた」

精霊の事ならばフインやリヴエリアにも多少の知識はあるが、神そのものに関して分かる筈もなく、二人は主神である口キを信用する他なかつた。

「……その上で口キは彼の事をどうするつもりなんだい？」

「…」

フインの問い合わせに口キは迷わずファミリアとして迎え入れると返すつもりだつた。しかし、その言葉は喉元で詰まり口を開いたまま固まってしまう。

クレインに神の血が混ざつてゐる事はほぼ確定だ。神の恩恵を授ける際に生じた異常。アイズが持つてきた大剣。そしてクレインの異常な生命力。それらが事の裏付けを物語つてゐる。

しかし、誰がどのような目的でクレインにそのような事をしたのかが、口キには分からなかつた。ただ、少量とは言え神の血を受け入れる事の出来る器。そんな存在を手放すとは到底思えない。クレインに血を与えたであろう黒ローブの女は間違いなくクレインに接触しに来る。そう口キは確信していた。

だからこそ、人に血を与えるなどと言う禁忌を犯したその女が恐ろしいのだ。禁忌を破ることを厭わない存在ならば神が持つ本来の力を使つても可笑しくない。その力がもしファミリアの子供達に向けられたらと思うと口キは最後の一歩を踏み出す事が出来なかつた。

更に問題はそれだけではなかつた。

口キ・ファミリアがダンジョンの探索を主とするファミリアの以上、戦闘はまず避けることが出来ない。だからこそ戦闘を求めるクレインには合つてゐると考えていてい

たのだが、クレインに発現したスキルは常軌を逸するものだつた。

狂戦士化。一見レベルが無条件で上がる強力なスキルのように思えるが、そんな事は有り得ないと口キは考へてゐる。スキルの名を見れば薄々察する事が出来るが、恐らく理性と引き換えて力を得るスキルと考えて間違いないだろう。

もしそう考へるのならば、パーテイーを組んで戦う以上、理性を失う仲間が居ると言う事は大きな危険に晒される事になる。効果が最大になれば2レベルも上昇するのだから尚更だ。

ファミリアに置いておいても正体不明の神がやつて来る可能性は高く、ダンジョンに遠征に行かせれば他の子供達が危険に晒されてしまう。まさに八方塞がりの状態なのだ。その事もあり、口キはフインの間に答えをかえせないまま、懐から一枚の紙を取り出した。

「：取り敢えずこれみてみ」

そう言ひながら口キはフイン紙を手渡す。それはクレインのステータスが複写されたものだ。本来ステータスは他人に見せるものではないが、クレインは特例と言える。

「：これは神の血を受け入れた恩恵つてやつなのかい？」

「凄まじいな。レベル1でreasスキルが四つなど聞いた事も無い」

フインとリヴエリアは同様の反応を示す。口の端は引きつっており、表情は強ばつて

いる。まさかこれ程までの存在だとは思つていなかつたばかりに返つてきた反動はでかかつた。

そんな二人の反応を傍目で見ていたアイズは紙の内容が気になるのか、そわそわと落ち着きのない動きを見せ始める。

「… アイズにも見せて構わないかい？」

アイズの様子に気付いたフインは苦笑いしながらロキにそう訪ねた。

「もちろんや。クレインはアイズと似通つたもんやからな… 知つておいた方がええやろ」

ロキの了承を得たフインは手に持つていた紙をアイズに手渡す。素早くその紙を受け取つたアイズは期待の眼差しでステータスに視線を移した。

「え… すごい」

「あはは、凄いで済むスキルじやないんだけどね…。流石に自信を無くすよ」

「スキルだけ見れば私達と何ら違ひはない。いや、むしろ私達の方が劣つているだろうな」

第一級冒険者をもつてしても持ちえないレアスキルの数。一つがレベル上昇のスキル。一つが全ステータスの大幅アップ。一つが腕が千切れようとも戦えるようにするスキル。一つがステータスの伸びを補助するスキル。そのどれもが最高級と呼べる効

果を秘めたスキルだ。最前線で常に命を削つて戦うフイン達からしたらそのどれもが欲しいと言えるものだつた。

「… そうやな、確かに効果だけを見ればふざけたしろもんや。だけどな、分かつとるやろ？」

ロキが暗に聞いているのは先程の狂戦士化のスキルのことだ。

「ああ、分かつてるよ。確かに狂戦士化のスキルは良い予感がしないね」

団長と言う立場にいる以上、クレインの存在を蔑ろに扱う事は出来ない。しかし、同情で無策に遠征に組み込んでしまえば他の団員に被害がでる可能性は直ぐに理解する事が出来た。フイン同様リヴエリアもロキの言いたい事を理解し、口を開く。

「私達のようにレベルが5・6ある者は背後から襲われても安全に対処出来る。少なくとも現時点ではな。だが他の団員はそうもいかない」

幾ら最大規模のファミリアと言えどその大半は低レベルの冒険者で占められている。そのような者達にレベルが2上昇しステータスに大幅な加算が加えられた状態で襲われたらひとたまりもない事は容易に想像出来る。

「普通ならば遠征隊に組み込む事は出来ないが… どうしたものか」「個人でダンジョンに潜らせても他のファミリアの人達を襲うような事態になつたらまずいからね…」

もし実際にダンジョン内で他ファミリアの人間を襲い、ファミリア間の戦争に発展してしまった場合被害を被る可能性は非常に高い。

遠征隊に組み込むと仲間割れの恐れがあり、一人での活動をさせるものならそう言った危険性がある。その内に秘めた力が幾ら強くとも制御出来なければ意味がない。

まさに諸刃の剣と言えるだろう。その身に秘めた潜在能力は強大。将来性を考えれば代わりなどないと断言出来るほどの逸材だ。しかし、それらに付属する相応のデメリットに日々困惑するしかなかつた。

「確かにこれは困った問題だね……このスキルが本当に僕達が考えているようなスキルだつたらの話だけど」

「……確かに憶測だけで語るべきではないな。明確な線引きをしておかなければ話は進まない」

結局の所この三人が話しているのは仮定にすぎない。もしかしたら、このスキルを自分の意思で明確に制御可能かもしれない。更には根本的に三人が間違えており、狂戦士化のスキルはデメリットのないレアスキルかもしれない。つまりは、そのラインを明確に定めなければ判断を下す事は出来ないと言う事だ。

「線引き言うても……どないするつもりや？」

「当然団長である僕が相手をするよ。力の加減も得意だからね」

そう言いながらフインは無意識にアイズの方へ視線を送ってしまう。

幸いにしてアイズはその事には気づく事はなかつたが、リヴエリアに軽く足を踏まれたフインは小さく肩を竦めた。とは言え格下の相手に最も上手く立ち会えるのはフイン以外にいない。アイズを含めたレベル5の冒険者達ではクレインの命が危ない。そういう言う意味でもフインの考えは正しいだろう。

「フインの言つている事は正しい。そいつがどのような戦い方をするのかは分からないうが、フインならば柔軟に対応出来るだろう」

「そうやな…：これから為にも必要なことやし…： フイン、任せんで！」

「ああ、任せた…： って事になつたけど、君もそれでいいかな？」

そうフインはソファーの上で氣を失つていたクレインに話し掛けた。口キやアイズに限つてはクレインが未だに氣を失つていると思つていた為に目を見開いてクレインに視線を向けた。

フインのそう問い合わせられたクレインは数秒程動かなかつたが、背中越しに向けられた視線に耐えられなくなり、おもむろに体を起こす。

「いつの間に気が付いとつたんや!？」

「俺のスキルだかの辺りだな。どうにも起きづらい空気だつからな」

その答えに口キは安心する。少なくともフインとの話は聞かれていなかつたのだ。

だがそれと同時に安心感を抱いた自身に強い嫌悪感を抱き苦々しい表情になる。

その一方で意図せず話を盗み聞きした事に対し多少の罪悪感を抱いたものの、そんな感情を吹き飛ばす程の歓喜でクレインは満たされていた。

話を聞いていて自身のスキルが危険な代物で周囲の人間に危害を与える可能性がある事は分かつた。ファミリアに入った手前このような形になってしまい後悔の念が生じるが、そんな事よりも目の前の男と戦えると言うことが嬉しくて堪らなかつた。

本音を言えば戦いたくはない。だが、心が、魂がざわついて仕方がないのだ。クレインはその本能とも呼べる強すぎる欲望に抗う事は出来なかつた。

「それで団長だつたか…俺と戦つてくれるのか？」

「うん。もちろんだよ。団員の事は把握していないといけないからね」

そうフインが答え、それを聞いたクレインの口端が吊り上がる。レベル1とレベル6の結果は目に見えてる試合。だが、重要なのは勝ち負けではない。この勝負がクレインの今後を決定付ける大切な試合になるだろう。